

第40回 例会 報告

1997年12月6日(土)に、本会の第40回例会が筑波大学文科系修士棟において行われた。例会で行われた朝倉隆太郎氏の講演の要旨は以下の通りである。

中学校校歌でうたわれる山地

朝 倉 隆太郎*

従来の教育環境学では、環境の指す範囲を学校や友人・家族などと捉えて、それらが子どもに与える影響を研究してきたが、ここでは、もう少し環境の範囲を広く捉えて環境と教育の関係を探るため、校歌をテーマに取り上げて、地理学的に考察を行う。後述するように、校歌には山地が歌われることが多く、校歌が子どもに与える影響を考察することは、山地という環境要素が子どもに与える影響を考察することにもつながるであろう。

調査方法は以下の通りである。校歌に関する調査用紙を各地の中学校へ郵送する。調査項目は、歌詞、作詞者・作曲者、校歌制定の年次と経緯、学校の創立年次(統合を含む)、校歌をみんなで歌う場合、の5項目である。そして、地勢図や地方図に学校の位置を落とし、歌詞に描かれた環境要素との考察を行う。なお、今回の発表では時間の都合により、歌詞の考察に関してのみ、発表が行われた。

まず、環境要素を山地、河川、平野、海洋、気候、動植物、産業・交通、歴史的背景の8つに区分し、どの環境要素が校歌に歌われているかを各都道府県別に見てゆくと、ほとんどの都道府県で一番多く歌われていたのは、山地であった。割合にして7~8割を占めているところが多く、2位以下の環境要素を大きく引き離している。山地が1位ではなかったところは、長崎県と沖縄県の2県のみであり、ともに海洋が1位であった。

次に、5校以上の校歌に歌われている山地を地図に落とし、その山地を中心として、それを校歌に取り上げている中学校の分布範囲を円で示す。これはいわば、校歌から見た山地の勢力圏(山岳圏)を示した地図といえよう。この地図を見ると、東は茨城県、西は三重県にまで延びた、富士山の広範な山岳圏がやはり目立つ。それ以外に広範な山岳圏を持つ山地は、順に筑波山、秩父山地、生駒山、赤城山、伊吹山などである。ここから、校歌に歌われる山地の条件としては、①可視、②高い、③美しい、④信仰の対象、⑤まわりに人口が多い(位置)などがあげられるだろう。ただし、②や③に関しては、より身近で魅力のある山にひかれる現象も見られる。これは、大都市の商圏の中に中都市が存在した場合に大都市の勢力が多少減り、その外側で再び上昇する潜上現象に似ているといえよう。

更に、校歌に歌われている数の多さからみて、中学校校歌から見た50名山の選定を行った。校歌の教育効果としては、一つの目的・目標を表現しているということ、集団の絆を深める役割を果たすということ、卒業後に在学中のことや友人のことなどを懐かしむことができること、などがあげられる。このようなことを今後、卒業者などへのアンケート調査によって立証してゆけたら、とも考えている。

*豊田短期大学